

Yogavāsīṣṭha と禪

藤 吉 慈 海

1

普通に Yogavāsīṣṭha と呼ばれ、三萬二千のシローカよりなつていたと思われるこの作品が何時の頃の作であるのか、印度における他の多くの作品と同様に決定しにくいものである。しかし大體において過去一千年近く、ウパニシャッドやバガバットギーターと同じ基礎の上に立つ最も重要な作品の一つとして、印度人の精神生活の上に重要な働をなして來たものであることは疑いない。しかし從來この作品は少數の學者を除いて一般の印度の學者の間には注意せられるところがすくなかつたようである。

しかし作品自身は美しい simile と Metaphor によつて文學的に飾られ、わかりやすい文體で書かれている。この作品の著者ヨーガヴァーシシュトハ自身、「若しこの哲學を研究し、理解し、これを體得するならば、人は何等他に解脱の道を求めるを要しない」（二・一八・三五）とのべ、「それはすべての惱を止め、心に獨特の慰を與え（二・一〇・九）喜と苦を越えた最高の祝福に導き（二・一〇・七）毎日これを學ぶ人は神の意識を得るに至る（三・八・一五）これは確かに智慧の倉庫であり、その何處にも最上のものを藏している」（三・八・一二）と述べている。これによつてみると、ヨーガヴァーシシュトハは彼以前に存在した印度教や佛教やジャイ

ナ教等の印度思想の中の最良のものを吸収し、彼自身のものとして新に語つている一種の解脱の書ということが出來よう。

2

次に中國ならびに日本の禪との關連において、ヨーガヴァーシシュトハを考察してみると、自ら實踐の問題が取りあげられる。

ヨーガヴァーシシュトハはかく言う。「絶對を眞に知るためには、われわれは絶對の中に擴がらなければならぬ」（VII. 22. 1-5）それで、如何にしてこの擴大をなすかは、この實相の性格を知ることと同様に重要な吾々の生命の問題である。そして、それはヨーガヴァーシシュトハにおいては「ヨーガと呼ばれている」（VIa. 13. 3. Va. 128. 50-51）ヨーガ即ち眞實の自己の自覺の道は二つの方向を持つてゐる。即ち（a）限界があり不完全である個の否定と（b）完全であり普遍である眞實の自己肯定の道とである。

われわれの個は知、情、意の三者から成立つてゐるが、これらの三つのものは、その根柢においては一なるものである。しかるに眞實の自己は單に絶對的意識であるのみならず、絶對的安息であり、また絶對的祝福である。それで眞實の自己の自覺の方法もまた此の三つのプロセスにそつて、あるいはそのいずれかの一つにそつてゆく。何となればそれはただ一つのプロセスの四つの異つたアスペク

トにすぎないからである。即ち(一)にはわれわれが單なる一個人ではなくして無限なる絶対であるという知的な確信を持つこと。(二)には欲望や執着や好悪や、これを得たいとか彼れを得たいとか、これを得たとか彼れを得たとか、すべてわれわれが個であるということにまつわる感情を否定すること。この否定のプロセスにそつて、われわれは平靜であるとか、全世界が兄弟であるという同朋の意識とか、あるいは、われわれがすべての存在と一つであるという宇宙的な感情を積極的に陶冶することや更にはまさに恍惚境に入りつつある眞實の自己への愛などを持つこと。(三)にはわれわれの内的存在の外的象徴である *Purna* 即ち呼吸の調節によつて、生命の不斷の活動性を止める實踐。つまり呼吸のとどまる經驗と意識のとどまる經驗とは相對應するものである。われわれの日常生活においては如何に一時的のものであるとしても、プレーナをとめることによつて意識が止る。その休止を延ばすことによつて次第に生命の不斷の活動性をも止める實踐である。これらの三つがヨーガヴァーシシュトハによれば、眞實の自己の自覺の方法である。この中には印度で發見された最良の方法がすべて含まれているといわれている。

三

ヨーガヴァーシシュトハにおいては眞實の自己の自覺の道に七つの段階が説かれている。つまり實相界においては、この眞實の自己は常に自覺されており、個は常に絶対と一であるが、個人の立場においては、それは熱意と努力の如何によつて長短さまざまである。ヨーガヴァーシシュトハにおいては七つの段階がつけられている。(1)個人が個人の生活の色々の惡を意識するに至つて、それを超越しようとして望む *Subhecchā* (2)彼が自己と世界の性格についてよく思

惟し研究する *Vichāra* (3)哲學的思索によつてあらわとなつた自己の究極的非實在性を知り、個が次第に不確かなものとなり、また感覺的なものでなくなる *Tanumanasa* (4)彼がその内に眞の自己の存在するのを感じはじめ *Satvapatti* (5)すべての欲望を超越することによつて、外界の對象に對する執着が遂に克伏される *Asaṃrakṣa* (6)絶対の中においては、すべてのものは實在しないと自覺される *Padarthabhavana* また他の讀み方をすると、個が自ら究極の實在であると思ふ *Padarthabhavana* (7)絶対と一になつた神秘的體驗が意識の中において自覺される *Turyaga* これが言證を絶する *Nirvāṇa* に入る最後の門戸である。この第七の段階に住む人を *Jivanmukta* 即ち解脱せる人と呼ぶ。それから先は體得されない解脱と呼はれる状態である。(III. 118. 2~16)

四

眞實の自己の自覺の最後の段階にある聖者(解脱者)の生活は、その主觀的經驗の立場からは、既に超越され否定されている個人の最後の生活であるが、客觀的には此の世の中に彼の前の意志の物質的結果としてなお繼續している個としての最後の生活である。それは實在としてはもはや存在しない。いわば前の主觀的個性の物質界における影である。ジーヴァンムクタの場合、その解脱者の個性は完全に解消し、精神や思想の世界ではもはや個であると實際には感じていないが、しかし前の個性の結果または過ぎ去りつつある影として形而下の世界に生きているように見え、否實際に生きている。彼の生活は他人にとつては實在であるが、彼の心の中では一つの幻影であり、彼がその中に意識的に存在している眞の自己にとつては非實在である。即ちヨーガヴァーシシュトハによれば、これがジ

ヴァーンムクティ Jīvaṇmukti 即ちまた生きている間に體驗される解脱の觀念である。

次にこのような解脱の生活については澤山の記述があるが、そのような解脱人が如何にこの世の中に生活し如何に振舞っているかについてヨীগヴァーシシュトハは次のように述べている。

快樂も彼を喜ばせず、苦痛も彼を苦しめなく。(Vib. 169, 1) 非常に烈しく且つ永く續く喜や苦の状態に對しても、その心の中に好惡の感情はなく。(Vib. 198, 27) 世俗的な行爲に對して外見上は關與してゐるが、如何なる對象に對しても心の中には何等の執着もなく。(Vib 169, 8) 彼の行爲は誰れをも苦しめない。そして彼は理想的な市民であるかの如く、またすべての人の友人であるかの如く振舞う。彼は外見は非常に忙しく見えるが、心は常に平靜である。(Vib 98, 5) またカーストや宗教上の主義信條や、生活の段階 (āśrama) や慣習や、色々の聖典の制限から自由である。(Vib 122, 2) そして彼は至上の祝福の中に安らかに息つてゐる。(Vib 122, 4) 彼は自分に何か得たいために働かさない。彼は常に幸福であるが、決してその喜を何か他のものにまつわりつけはしない。彼の顔には常に快活な光澤があふれている。(Vib 116, 3) 彼は心に何等の汚れもとどめず、時に應じて友人と交わる。敬虔な人と交る時は彼も敬虔であり、惡者に對しては彼も惡者にみえる。子供たちと交る時は子供のよう遊び、若人たちの中では若人となる。また老人の中では恰かも老人であるかの如く振舞う。彼は勇氣のある人々の間では勇氣にみちており、他人の悲しみを自らも分け持つ。(V. 77, 13, 14.) 外にあらわれたすがたに關する限り解脱した人と無知なる人との間には何等の相異はない。しかしその相異は解脱し

た人には全々な欲望が、無知なる人にはあるということである。(W. 15, 37)

ヨীগヴァーシシュトハによれば、解脱せる個人は肉體の死後、個として全く存續してはならぬということはない。解脱せる人々は自發的に個人として存在しつづけ、宇宙的な活動に參與し、知識を普及せしめて他の人々の解脱の働をたすける。ヨীগヴァーシシュトハによれば解脱の中心は、絶對即ちブラフマンとの完全な一致の意識的自覺である。

五

ヨীগ即ち眞實の自己の自覺の道が、ヨীগヴァーシシュトハにおいても、限定的不完全なる個の否定と完全にして普遍的なる眞實の自己の肯定の二面をもつてゐる點は、中國ならびに日本に發達した禪における眞空妙有といわれ、絶對否定即絶對肯定の論理と相通ずるものがある。次に眞實の自己の自覺の方法としてあげられた三つの方法は第一、第二は禪においても考えられることであろうが、第三のプラナーの習練については、數息觀と通ずるものがあり、瞑想の初期の段階には特に奨励されるものである。しかしヨীগに説く呼吸の停止と意識との相關々係や、入定の體驗等については今後の比較研究にまたねばならぬ。また眞實の自己の自覺における七段階については、十牛圖や六牛圖と比較研究するとき、十牛圖に第十入鄺垂手のあることは大乘の向下慈悲門を象徵するものであつて、ヨীগにこれを缺くきらいのあるのは中國中世思想家をして、ヨীগを外道禪と批難せしめた一理由であらう。しかし中國の禪が時にその言詮簡潔にすぎ高踏的なるに比し、正統的な印度のヨীগが分析的にして論理的であることは注目し値する。